

2022年3月7日

公益財団法人大学セミナーハウス
古田武彦記念古代史セミナー実行委員会
委員長 荻上 紘一

「古田武彦記念古代史セミナー2022」における講演者募集のご案内

古田記念古代史セミナーは今年で5回目になります。今回は11月12～13日に

「聖徳太子」と「日出づる処の天子」

をテーマとして開催し、以下の5部構成とします。

- 特別講演：大山誠一氏
- 古田武彦氏の業績に基づく論点整理：大越委員
- 情報交換会（司会：西坂委員）
- セッションⅠ：『隋書』を徹底して読む（司会：和田委員、問題提起：大墨委員）
- セッションⅡ：日本の文献を徹底して読む（司会：富川委員、問題提起：橘高委員）

セッションⅠとセッションⅡの講演者を公募することにしました。各セッションの趣旨を御確認の上で、講演者募集要項に沿って応募してください。

【各セッションの趣旨】

<セッションⅠ>：『隋書』を徹底して読む（大墨伸明）

『隋書』倭国伝と『日本書紀』推古紀、これまでの日本古代史学は二つの史料に横たわる食い違いを前にして、さまざまな手法でその結合を計ってきた。時に『隋書』の記事を疑い、また時には『日本書紀』の信憑性を問うことで、これらを隋朝とヤマト王権の同一の外交関係の記録と見なし、当時の「倭国」＝「推古朝」の「歴史」を描き出す努力が重ねられてきた。

しかし、こうした研究によっても二つの歴史書の空隙を未だに埋めるに至っていない。『隋書』開皇二十（600）年の遣使が『日本書紀』に欠落する問題をはじめ、二つの外交記録はその時期、人物の氏名、儀式の様子などが明らかに異なる。また、唯一共通する裴世清もその肩書は、倭国伝では「文林郎」、推古紀では「鴻臚寺掌客」とある問題、推古紀が一貫して隋ではなく「(大)唐」への遣使とする問題も謎のままである。さらには、その他の地理・政治・社会の様子も違いが大きい。『隋書』には「阿蘇山」など九州の地名しかないこと、推古十一（603）年実施の「冠位十二階」が『隋書』開皇二十（600）年にすでに「内官十二等」と記され、しかも順序が異なることなど、枚挙

にいとまがない。

それどころか、研究の進展は二書の対照的性格をますます際立たせているかに見える。一つは王の姿である。『隋書』では「阿毎の多利思北孤」が男王であることに異論はない。加えて、「天子」を自称し、仏教を信仰する王でもあった。女帝・推古天皇や聖徳太子らしき人物は登場しない。「多利思北孤」と「推古天皇」の溝は深い。二つめは外交関係の性格である。『隋書』では文帝は「義理なし」「訓えて之を改めしむ」といい、煬帝も「悦ばず」「無礼なる者」と怒りを露わにしている。そして「遂に絶つ」と結ばれ、緊張感のある関係がつぶさに見てとれる。他方、『日本書紀』推古紀は「天子」とその「臣」の関係が明示され、友好的な「朝貢関係」であった。

この両書をあらかじめ結び付けて理解する方法は、大きな壁に直面しているかに見える。636年に同時代史料により『隋書』が成立したのに対して、その84年後に完成した『日本書紀』は『隋書』倭国伝の記述とのくい違いを承知して編纂されている。いまこそ、『隋書』はそれ自身によって解することを正道とすべきで、七世紀前半の東アジア世界を背景にして誕生した『隋書』を「徹底してよむ」ことが求められよう。『隋書』が描く「倭国」はどのような国だったのか。また、「日出づる処の天子」多利思北孤は何処にいたのか。そして、二つの史書が結合できない原因が何に由来するものなのか。古田武彦氏の提起を検証する新たな研究に期待したい。

<セッションⅡ>：日本の文献を徹底して読む（橘高修）

『日本書紀』（以下、書紀）の中で、「聖徳太子」は敏達紀から舒明紀にかけての五つの天皇紀に、様々な名称で登場している。書紀以外にも「聖徳太子」に関しては、法隆寺系史料と呼ばれる釈迦三尊像光背銘や薬師如来像光背銘の金石文、天寿国繡帳銘や『上宮聖徳法王帝説』などが存在する。

それぞれの史料を比較してみると、書紀と法隆寺系史料の記述が大なり小なり異なっているだけでなく、法隆寺系史料間どうしても記載内容に相違がみられることを確認することができる。戦前から「聖徳太子」に関する史料は信憑性に乏しいとされ、その業績は疑問視されてきた。その一方「実在説」も根強く、歴史教科書が未だに実在を説くところとなっている。1999年大山誠一氏は『〈聖徳太子〉の誕生』で厩戸という皇子はいたが、「皇太子」「摂政」はおらず、藤原不比等が創作したものとし、その虚像としての「聖徳太子」は衝撃をもって受け止められた。多くの学者たちが長期間にわたって研究しているにもかかわらず、「聖徳太子」に対する認識は定まっていない。

古田武彦氏は1985年に『古代は輝いていたⅢ 法隆寺の中の九州王朝』（朝日新聞社）を出版して「聖徳太子」問題に一石を投じた。第一次史料として金石文を重視し、釈迦三尊光背銘に記されている「上宮法皇」は聖徳太子ではないと論証し、その人物を『隋書』倭国伝の「多利思北孤」であるとした。そして、東北大学時代の恩師でもある碩学の家永三郎氏と有名な『聖徳太子論争』（1989年、新泉社）を展開している。

セッションⅡでは、第一次史料を重視しつつ法隆寺史料を史料批判する古田氏の方法論を検証し、古代史学会を依然として支配している従来説に対して、くさびを打ち込む研究成果を期待したい。

【講演者募集要項】

1. 2つのセッションで講演者を公募します。
2. 講演時間：1人30分
3. 募集数：各セッションとも3名
4. セミナー当日までの流れ

① 応募

- ◇ 応募締切：5月13日（金）
- ◇ 応募方法：メール（*応募用紙をダウンロードして記入してください*）
- ◇ 提出頂くデータ：タイトル30字以内、要旨100字以内、概要1000字以内
- ◇ 提出先：公益財団法人大学セミナーハウス セミナー事業部

Email: seminar@seminarhouse.or.jp

TEL:042-676-8512（直通）FAX:042-676-1220

〒192-0372 八王子市下柚木 1987-1

② 選考結果の通知

- ◇ 5月23日（月）開催の実行委員会における選考を経て、5月末日までに応募者へ通知します。

③ セミナー募集要項とHPに掲載

- ◇ 提出いただいたタイトルをセミナー募集要項に掲載します。
- ◇ タイトルと要旨をHPに掲載します。

④ 講演予稿の提出

- ◇ 講演者として決定した方には、応募の際に提出していただいた概要に沿った内容の講演予稿の提出をお願いします（9月16日締切）。詳細は各講演者にお知らせします。
- ◇ 提出された講演予稿は、『予稿集』としてセミナー参加者に配布し、後日HPにも掲載します。

以上